

大阪府警潜入捜査官

2007(平成19)年6月4日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★



監督＝萩庭貞明／出演＝神保悟志／高野八誠／高橋真子／藤真利子／相島一之／中原丈雄
(アイコット配給／2007年日本映画／105分)

第2章

男臭さ満開！

……「もし、日本にも潜入捜査官がいたら……」という仮説を基に、『インファナル・アフェア』(02年)、『ディパーテッド』(06年)に続いて、コテコテの大阪版「潜入モノ」が登場！ よくできたストーリーながらB級映画らしく(?)、本部長との接触シーンなどに不自然さも……？ また、ヤクザってあんなにパンツを乗り回せるの？ という素朴な疑問も……？ 他方、真面目な疑問としては、潜入捜査官の収入や危険手当はHow much……？ また、入れ墨という身体的負担の見返りはHow much……？



B級映画もしっかりと

大阪では第七藝術劇場とシネ・ヌーヴォーが特徴ある単館の双璧だが、天六にあるホクテンザの特徴は、「場末の映画館」ということ……？ サービスも設備も決して良くないし、連日オールナイト営業をやっているだけに、また場所柄からも(?)客層は良くないが、私にとってのこの映画館のメリットは次の2つ。

その第1は、時々見逃していた有名作品を昔ながらの2番館的に上映してくれること。そして第2は、シネコンや上品な単館では決して上映しない(?)『花と蛇』(04年)、『花と蛇2 パリ/静子』(05年)、『完全なる飼育』シリーズ、『紅蜘蛛女』(05年)、『劇場版 ゼロ・ウーマンR 警視庁0課の女/欲望の代償』(07年)、『桃色』(04年)などのB級映画(?)を、この映画館はしっかりと上映してくれること。今日は完全にその後者のパターン。午後8時過ぎまでしっかり事務所の仕事をこなしたうえ、9時25分からの回でこんなB級映画もしっかりと……。

『インファナル・アフェア』『ディパーテッド』そして『大阪府警潜入捜査官』

「もし、日本に潜入捜査官がいたら……」というひとつの仮説を基にこの作品はつくられたらしい……。考えてみれば、香港マフィアの『インファナル・アフェア』（02年）、ニューヨークマフィアの『ディパーテッド』（06年）と肩を並べられるほどヤクザなまちといえ、やはり神戸か大阪……。したがって、『インファナル・アフェア』が大人気となり、またそれをハリウッド版でリメイクした『ディパーテッド』がアカデミー賞監督賞、作品賞など主要4部門を受賞したとなれば、大阪版で2匹目、3匹目の柳の下のどじょうを狙おうとしたのは当然……？

現職刑事がわざと罪を犯して刑務所に入り、ヤクザの幹部と接触する中で、次第にその信頼を獲得し、重大な情報を得てそれを警察に流す。そんな『インファナル・アフェア』ばりの話が大阪府警でも……。そりゃあってもおかしくない話だが、今ドキ、そんな使命感に燃えて自己犠牲に耐えられる警察官がいるの……？

『ミナミの帝王』とはちょっとイメージが……？

竹内力のハマリ役となった萬田銀次郎が登場するコテコテの大阪映画が『難波金融伝 ミナミの帝王』シリーズ。ネット情報によれば、この『難波金融伝 ミナミの帝王』は1992年にスタートし、次作で60作を超えとのことだからそりゃ立派なもの。そしてこのシリーズを監督しているのが萩庭貞明。したがって、『大阪府警潜入捜査官』という大阪色豊かな映画をつくるについて、この萩庭貞明監督が最適と判断されたのはある意味当然……。

しかし、同じようにヤクザがたくさん登場しても、『ミナミの帝王』は金融ヤクザだが、『大阪府警潜入捜査官』がターゲットにするのは、麻薬・売春を中心としたヤクザの本丸……。したがって、竹内力扮する銀次郎がヤクザまがいの雰囲気ながら、あくまで法的に認められたギリギリの手段によって悪徳ヤクザをやっつけ、被害者を救済し、かつ自分も喜ばれながら儲けるというおいしい話は、そこではなかなか難しいのでは……。さて、金融ヤクザとは全く異質の、ヤクザの本丸である麻薬取引の情報を集めその根を断つため、大阪府警は一体どんな潜入捜査を……？

法律監修は、あの……

今大阪で1番有名な弁護士は、『行列のできる法律相談所』に出演している橋下徹弁護士だが、かつては全国区でトップの中坊公平弁護士がいた。そして、山口組の顧問弁護士としてかつて世間にその名をとどろかせたのが、私とほぼ同世代の山之内幸夫弁護士。

彼は、過去のそんな自分の弁護士としての体験を活かして、いくつかの映画づくりに参加してきたようだが、『大阪府警潜入捜査官』もその1本。したがって、映画の冒頭とエンドロールで、「法律監修 山之内幸夫」という文字が流れてくるから、是非それに注目を。

法律監修として、この映画づくりで具体的にどんな役割を果たしたのかはわからないが、ラストの法廷シーンでの証人尋問（というより独白）がちょっと不自然だった点を除いて、私の目にも法的な違和感は全くなし。しかし、ちょっと斜めの視点から、潜入捜査官である杉崎（神保悟志）の描き方に多少不自然な点が目についたので、それを3点だけ……。

不自然さ その1——ヤクザはみんなベンツに……？

不自然さその1は、ヤクザといえば条件反射的にベンツと結びつく（？）のか、杉崎がやけに早くから立派なベンツを1人で乗り回していること。すなわち、この映画の設定では、彼は刑務所を出所した後直ちに瀬川組の兄貴分の家を訪れ、そこでやっとヤクザとしての人生をスタートさせたはず。そして、末端組織へのシャブの密売を続けて半年。今やっとその仕事ぶりが少し幹部たちに認められるようになったというレベル……。

瀬川組の組長が運転手付きのベンツに乗り、ヤクザ組織特有の組員たちの送り迎えがついているのはよくわかるが、いくら麻薬で大きく稼いでいるとはいえ、立派なベンツに乗れるのは組の上級幹部に限定されているはず。したがって、途中入社組（？）で多少見どころがあるといっても、半年やそこらで1人自由にベンツを乗り回すような特権が与えられているとは思えないのだが……。

不自然さ その2——ヤクザってこんなにヒマ……？

ヤクザが担当地域の見回りをするのは仕事だが、その途中1人でブラッと店に立ち寄ることくらいあるのは当然。冒頭の大捕り物シーンが終わり、やっと落ちついた杉崎がケガの介抱で世話になったスナックをブラリと訪れたのは、その意味で当然。しかし、ビールをひと口飲んだだけでボンと10万円(?)置いていこうとしたのはキザだった……。

そんなヤクザ特有のええカッコを嫌ったママの妙子(藤真利子)から店を追い出された杉崎は、今度は妙子の息子ケンジ(高野八誠)から「アニキ、アニキ」と慕われるまま、背中を押されるように彼の店へ。ここはカウンターだけのスナックだが、実は女の子をおいた売春宿。しかも、この店の女の子はどれもヤクヅけにされている商品のよう……。そんな1人の家出少女沙織(高橋真子)に、なぜか心惹かれた杉崎は、その後沙織に対して何かと親切(?)な行動をとるのだが、これはあくまで彼のプライベートな行動のはず。

ヤクザだって24時間、親分への奉仕を義務付けられているわけではないが、ヤクザは普通のサラリーマン社会以上に帰属意識が強く、そのため時間的制約もサラリーマン以上に重いのが当然。したがって、毎日寝る間もないほどこき使われているはずだが、なぜか杉崎には1人ベンツを運転して、沙織のお尻を追いかけ回す余裕が……？

この杉崎と沙織の絡みは、杉崎の人格描写とこの映画のストーリー全体に一定の深みを与えていることはたしかだが、同時にヤクザってこんなにヒマ、と思ったのも事実。

不自然さ その3——こんな接触がホントに可能……？

戦いの現場における情報の重要性は古今東西全く同じ。その重要性を認識し、国をあげてそのための組織をつくり上げ、それを権力者に売り込んだのが戦国時代における「忍びの者」。『インファナル・アフェア』や『ディパーテッド』そして『大阪府警潜入捜査官』が描く潜入捜査の原型は、彼ら忍者にあることは明らかどころ。

時代の流れが今ほど早くないこともあり、当時はある組織へ潜入した忍者は、一生姿を変えたままで情報を集め、それをボスのところに流していたらしい……。そんな話を持ち出さなくても、潜入捜査官にとって最も難しいのは、命がけで得た情報の伝

達方法。今ドキ、ケイタイという便利なものがあるじゃないかといっても、夫婦間ですらケイタイ履歴を内緒で見られているかもしれない時代、そう頻繁にケイタイで連絡をとることは危険なはず。ましてや、潜入捜査官と大阪府警察本部長である上原（中原丈雄）が、直接2人で顔を合わせるというのはよほど慎重にやらなければ……。

この映画では、この2人が密会するのは、住之江の競艇場のよう（？）だが、こんな接触がホントに可能な……？ ちょっとでも誰かに見られたり、そうでなくても「どこへ行ってたんや？」と質問されて、辻褄の合わないことになるのでは……？

真面目な疑問——潜入捜査官の給料や待遇は……？

斜めから見た疑問点は他にもあるが、そんなあら探してみたいなことはここまでにして、「もし、日本に潜入捜査官がいたら……」という設定で私が真面目に疑問に思うのは、潜入捜査官の給料や待遇はどうなっているの、ということ。警察官は公務員だから、給料は法律によって厳格に決まっているはず。また、危険手当や殉職した場合の金一封などの規定もあるはずだが、それらはすべての人間に画一のはず。

しかし、潜入捜査官はその身分がバレたら半殺しにされるか、殺されることは確実な危険な任務。そんな杉崎の給料や危険手当は How much……？ また杉崎がその上半身一面に彫った入れ墨の料金は当然警察持ちだろうが、それによる身体的負担の見返りは How much……？ 外務省や防衛省には機密費という勘定科目があり、スパイの活動資金などはそこから出されているはずだが、警察の中にそんな機密費はあるの……？

検察庁の調活費とは……？

ちなみに三井環氏のホームページを開いてみると、現役の大阪高検の公安部長であった三井環氏が、検察庁上層部の組織ぐるみの調査活動費横領疑惑について内部告発しようとしたことに端を発した事件のことが大きく載っている。

これは、検察庁にも調査活動費という名目による裏金づくりがあり、それが検察幹部の遊興費にあてられていたという驚くべき問題。この問題を三井氏がテレビ朝日の『ザ・スクープ』の取材に応じて内部告発しようとしていたところ、検察庁は突然取材当日の2002年4月22日、待ち合わせの3時間前に三井氏を逮捕するという前代未聞の事件となったわけだ。そこで三井氏や『ザ・スクープ』の鳥越キャスターたちは、

この逮捕を三井氏の「口封じ」のための逮捕だと主張しているわけだが、さてその真相は……？

後半、思わぬ人物が登場！

この映画は杉崎の潜入捜査を淡々と（？）追い、杉崎がシャブ取引の本丸に近づくのが間近なことを予告していく。ところが後半に入ると、突然強盗殺人犯の水島（相島一之）が登場してくるという思わぬ展開に……。すなわち、かつて杉崎の目の前で相棒の刑事を射殺して逃走し、その後、ようとして行方のしれなかったあの水島が、何と瀬川組のシャブ取引の相手方だったのだ。そして、それによって杉崎には、それまでのシャブ取引の摘発という任務の他、強盗殺人犯水島の逮捕という別の任務が追加されることに……。

杉崎是水島の顔を見てあの時の強盗殺人犯の水島だとすぐにピンときたのだから、水島がいつ杉崎の顔を思い出してもおかしくはないのだが、水島はなぜか杉崎の顔を覚えていないよう……？ 大規模なシャブ取引が迫り、その日時・場所を大阪府警察本部に連絡すべき立場にある杉崎にとっては、それは好都合だったが、それでもいつ水島が杉崎の顔を思い出すのかという危険性が増大したのも事実。したがってこんな局面でこそ、進むか退くかの適切な判断が要請されるのだが……？

藤真利子がいい味を……

杉崎と家出少女沙織との絡み、そして杉崎と杉崎を兄貴と慕うチンピラ、ケンジとの絡みがこの映画前半の主要なエピソードだが、後半には杉崎とケンジとの間の絆の崩壊と再度の構築が大きなドラマを生み出すことになる。その詳細は映画を観てのお楽しみだが、この2人の男の結びつきに大きな役割を果たすのが、ケンジの母親であるスナックのママ妙子。演技派女優、藤真利子演ずる妙子は、映画全般を通じて貴重な接着剤の役割を果たしているのも、是非彼女のそんな役割とそのいい味に注目を……。

2007(平成19)年6月5日記